総合都市研究　第48号 1993

大都市高齢者の地域参加型とその特質
－東京23区の調査事例－

はじめに
1．地域参加型の分類
2．地域参加型の属性分析
3．地域参加型と社会活動
4．地域参加型と生活意識
5．地域参加型と地域文化
まとめ

高　橋　勇　悦＊

要　　約

高齢社会における高齢者の地域社会への関与の問題は、今日一層重要な意義を持つようになっているが、われわれは、東京23区の高齢者を対象にした調査データを用い、高齢者の地域社会への関与の仕方を、町内会・自治会への加入・非加入と近所との交際の有無を軸にして、町会・近隣型、町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型の4つのタイプによって把握し、それぞれの特徴を明らかにしようと試みた。その結果、これらの4つのタイプの地域参加型は、高齢者の基本的属性からみても、高齢者の社会活動や生活意識においても、それぞれかなり明確な特徴をもっていること、また、地域によって、かなり異なった頻度で発現することなどが見い出され、これら4つの地域参加型は、高齢者の地域社会への関与の仕方を把握する上で、有効な分類であることが確認された。

はじめに

東京はすでに高齢社会の時代に入っているが、高齢化がさらに進行している状況にあって、高齢者の地域社会への関与の仕方、いわば高齢者の地域参加の問題を解明することは、一層重要な意義を持つようになっている。

第一に、よく言われるように、高齢者の生活は高齢期においてはそれ以前よりも地域社会との関連を否応なしに深めざるを得ず、いわば高齢者の快適な生活を求めるならば、その関連が大きな問題として浮上することになる。特に停年まで企業や官庁に勤務した給与生活者は、永年の間居住地の地域社会とのかかわりが薄いのが普通で、そのため停年後に簡単には地域社会にとけこめないといった事情がある。大都市、とりわけ東京の場合、ホワイトカラーの給与生活者が多く、この問題がもつ意味は重要である。

第二に、高齢社会は高齢社会に生きるすべての人々によって支えられるものであり、したがって

＊東京都立大学都市研究センター教授

高齢者自身も高齢社会を支える有力な一員である。そうだとすれば、高齢者は地域社会とどんな関与の仕方をしているのか、その実態を明らかにする必要があろう。特に、高齢社会の諸問題への取り組みにおいては、いわゆるマン・パワーが今後一層大きく期待されることになるが、この問題は当然ここにかかわってくる。高齢者のための高齢者自身のボランティア活動はまさにその意味で注目されよう。ただ、この意味における問題としては、マンパワーだけではなく、趣味・娯楽、スポーツ、近所付き合い（交際）などを含めた社会活動の問題も重要である。

第三に、こういった第一・第二の問題と深く関連するが、高齢社会における高齢者の問題への取り組みは、例えば、高齢社会における高齢者の役割喪失（縮小・消失）の問題への対応は地域社会における役割創出に期待しなければならないといった考え方に示されるように(*)、結局は地域社会（コミュニティ）の問題に帰着するように考えられる場合が多い。われわれも基本的には同様に考えているのだが、実際のところは、地域社会は高齢者の問題をはたしてどの程度まで背負いきれるか、問題である。高齢者問題をかかえる地域社会は大きな社会変動に直面し、対処すべき大きな問題は、高齢者問題だけに限られているわけではない。高齢者の問題をどの程度まで背負いきれるかという問題を考えるとき、少なくとも高齢者の地域社会への関与の実態をおさえておかなければなるまい。

本稿は、高齢者の地域社会への関与の仕方、いわば地域参加の実態を把握する一つの試みとして、東京における高齢者の地域参加型を設定するとともに、それぞれの地域参加型の特徴を明らかにしてみようと企図したものである。

＊例えば、金子勇『高齢化の社会設計』1984。
金子勇・園部雅久編『都市社会学のフロンティア３－変動・居住・計画』1992。

１．地域参加型の分類

今日では高齢者の地域社会への関与の仕方はいろいろあると思われる。例えば、もっとも一般的・普遍的な関与の仕方のタイプとしては、地域社会の近所の人々と日常的に接触し、また、地域社会の町内会・自治会に加入し協力するといったタイプであろう。このタイプの地域参加型は、近隣関係がごく普通に期待され、町内会・自治会がどこにでも存在する日本では、もっとも多いタイプであろうと推測される。

また、地域の官公・民間の施設の利用やイベントの機会を通して、地域社会へ関与するタイプも考えられる。この地域参加型も、それらの施設の拡大やイベントの増加がみられる今日では、決して少なくないであろう。このタイプは趣味・娯楽、スポーツ、教養・学習、地域活動など、多様な展開が考えられる。

さらに、地域問題や生活問題に取り組む住民運動・住民活動、あるいはボランティア活動に参加するタイプも考える必要がある。高齢者も、公害問題、リサイクル問題、ゴミ問題、高齢者問題等をめぐって、さまざまな住民活動やボランティア活動に参加してきていることは、もはや周知のことであろう。

地域参加への関与の仕方のタイプ分けはいろいろ考えられようが(*)、われわれは、ここでは、高齢者の地域社会への日常的・恒常的な関与を重視することとし、町内会・自治会への加入（役員経験の有無を問わない）の有無と、近所の人との週1回以上の接触（「合って話をする」）の有無を軸として、4つのタイプの地域参加型を設定した。すなわち、町内会・自治会に加入し、かつ近所の人とも日常的に（週1回以上）接触している「町会・近隣型」、町内会・自治会には加入しているが、近所との日常的な接触はない「町会加入型」、逆に町内会・自治会に加入していないけれども、近所の人との日常的な接触はある「近隣交際型」、および、町内会・自治会に加入せず、近所の人との日常的な接触もない「地域疎遠型」の４つである(**)。

町会・近隣型は、もっとも一般的・普遍的なタイプであり、昔からの伝統的なタイプともいえるだろう。町内会・自治会へ加入し近所の人との日常的な接触をもっている点で、4つのタイプのなかでは、地域社会への関与の態度はもっとも積極的・

意欲的とみなせよう。町会加入型は近所の人との日常的な接触はないから、町内会・自治会加入は名目的・形式的に過ぎないと思われるタイプといえよう。地域社会への関与の態度における積極性・意欲性も、それだけ小さくなっているとみられる。近隣交際型は、これとは逆に、町内会・自治会に加入してないものの、現実は近所の人と日常的に接触しているタイプである。このタイプも、積極性・意欲性は、それだけ小さくなっているとみられる。地域疎遠型は、町内会・自治会に加入せず、近所の人との日常的な接触もない、地域社会とは疎遠な関係にあるタイプである。もちろん、地域社会への関与の態度はもっとも消極的・非意欲的とみなせよう。

この4つのタイプは、あくまでも、町内会・自治会への加入と近所の人との日常的な接触の有無を軸として設定されているのであって、それ以上のものでも、それ以下のものでもない。もちろん、定義上、4つのタイプのうち、町会・近隣型と近隣交際型は近所の人との日常的な接触をもつ点で共通し、町会加入型と地域疎遠型はそれを欠いている点で共通しているし、他方、町会・近隣型と町会加入型は町内会・自治会に加入している点で共通し、近隣交際型と地域疎遠型は加入していない点で共通している。また、4つのタイプは、定義上は、ある特定の行動について、相互に排除し合う関係にはない。例えば、町会・近隣型の人でも、地域疎遠型の人でも、等しくボランティア活動に参加する場合がある、ということを否定するものではない。

この地域参加型の分類の仕方で問題があるとすれば、それは、町内会・自治会への「加入」の有無の点であろう。町内会・自治会は、一般に世帯単位の全戸加入を原則としてきた場合が多いと思われるが、そのために、全戸加入はしばしば自動的な（時には半強制的な）加入をともない、それだけ名目的・形式的な加入の世帯を含み、また、世帯単位の加入は世帯主名義の加入となっているために、しばしば世帯員の町内会・自治会加入の自覚が欠如・希薄化している世帯も含む傾向がある。いずれにしても、「加入」の自覚の意識はあいまいになる場合があり、加入していても、実際は加入していないと思い込んでいる場合、あるいはその逆の場合も生じてくる可能性がないわけではない。しかし、ここでは、町内会・自治会に加入していると回答すれば、実際には加入していないにしても、それだけ加入の自覚、参加の自覚があると解され、加入していないと回答すれば、実際には加入しているとしても、加入の自覚、参加の自覚はないと解され、いずれにせよ、地域参加型の分類の上では意味があると考えることにした。

＊ われわれは、東京都立大学都市研究センターのプロジェクト研究の一つとして1989年に「大都市高齢者の文化創造に関する調査」を行なったが、木下栄二は、その研究のなかで、高齢者の余暇活動における学習・文化活動を個人型、仲間・団体型、専門機関利用型、地域参加型の4つのタイプに分け、属性分析を試み、学習・文化活動が「階層」によって異なり、「地域」も規定要因となっていることを報告している。このうち、地域参加型の指標は、①地域の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ、②自治会・町内会や婦人会などの活動（行事）、③老人会や老人クラブでの活動（行事）、④文化センターや老人会館の行事への参加である。木下栄二・高橋勇悦「大都市高齢者の学習・文化活動」（都市研究センター『総合都市研究』39、1990）。

＊＊われわれは1990年にも、東京都立大学都市研究センターのプロジェクト研究の一つとして「大都市高齢者の生活スタイル」の調査を実施した。本稿で使用したデータはその調査結果である。この調査は東京23区の60歳以上75歳未満の高齢者を対象に行われた郵送調査で、有効票は4607票であった。詳しくは、拙稿「大都市高齢者の生活スタイル－都心部高齢者実態調査報告」（都市研究センター『総合都市研究』46、1992）を参照されたい。

2．地域参加型の属性分析

さて、われわれの地域参加型の分類にしたがっ

表1　高齢者と地域参加型　(%)

		町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
		41.3	23.9	17.0	17.8
年齢	～64歳	39.3	25.3	16.2	19.1
＊＊	～69歳	39.6	25.7	17.7	16.9
	70歳～	45.9	19.8	17.1	17.2
性別	男性	34.8	32.0	11.9	21.2
＊＊	女性	47.1	16.6	21.5	14.8
健康状態	非常に健康	41.0	26.2	15.3	17.6
＊＊	無理きかぬ	42.5	23.4	17.5	16.6
	病気・臥床	37.0	22.6	17.3	23.1
住居	持家	43.1	25.1	15.4	16.4
＊＊	借家	35.8	19.2	22.4	22.5
居住年数	10年未満	28.1	24.5	20.3	27.2
＊＊	20年未満	36.1	29.2	16.2	18.5
	50年未満	45.4	22.9	16.4	15.3
	50年以上	48.1	22.5	15.2	14.2
学歴	初等教育	49.0	18.1	20.2	12.7
＊＊	中等教育	41.9	23.7	17.4	17.0
	高等教育	27.9	34.5	10.6	27.0
現在の職	自営業	47.1	23.8	16.1	12.9
業＊＊	経営・管理	31.3	34.3	9.6	24.8
	雇用者	36.0	24.5	18.8	20.6
	無職	43.7	21.1	18.3	16.9
就労日数	5日以上	37.1	27.2	15.9	19.9
＊＊	3～4日	43.9	25.4	15.0	15.8
	1～2日	42.0	23.1	17.2	17.8
50歳時の	自営業	48.6	20.5	18.4	12.4
職業＊＊	経営・管理	30.1	34.6	9.3	26.0
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	29.1	33.0	14.7	23.1
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	37.5	25.4	16.2	20.9
	パート等	50.0	16.8	21.8	11.4
	無職	47.2	16.8	20.9	15.4
従業員規	1－29人	45.0	22.0	18.1	14.8
模＊＊	29～299	36.3	25.7	17.9	20.1
	300～	28.9	32.5	11.5	27.2
	官公庁	36.8	33.2	8.3	21.7
配偶者の	自営	48.7	21.9	17.5	12.0
職業＊＊	経営・管理	47.7	22.7	13.0	16.7
	社員	42.2	29.7	19.5	8.6
	パート	39.2	28.2	15.5	17.0
	無職	39.4	23.6	17.4	19.7
階層帰属	上・中止	39.0	29.3	12.1	19.5
意識＊＊	中	43.2	23.6	16.9	16.4
	中下・下	40.4	22.9	18.1	18.6
世帯収入	400万未満	42.5	20.9	19.8	16.7
＊＊	800万未満	42.7	26.4	14.5	16.3
	800万以上	39.3	28.0	12.0	20.7
家族形態	独居	36.2	15.0	26.3	22.5
＊＊	夫婦のみ	41.2	26.2	14.9	17.7
	夫婦子供	42.3	27.8	13.2	16.7
	拡大家族	43.4	21.6	18.6	16.4

＊＊ $x2$ 検定1%有意　＊ $x2$ 検定5%有意（以下の表も同じ）。

て、東京23区の高齢者の地域参加型をみると、もっとも多いのは町会・近隣型で41%を占め、これに町会加入型24%、地域疎遠型18%、近隣交際型17%がつづくという内訳となった。地域社会に関与している高齢者は83%、関与していない高齢者は17%で、地域社会に関与している高齢者は非常に多い。まず、これら4つの地域参加型に影響する要因と考えられる基本的属性から、それぞれのタイプの特徴を検討してみよう（表1）。

町会・近隣型　町会・近隣型は、町内会・自治会に加入するとともに、近所の人との日常的な接触も行なっているタイプであり、全体の41%をしめる多数派である。

この町会・近隣型は居住年数が長くなれば確実に増大する傾向がある。10年未満の居住歴では28%にとどまる町会・近隣型は、特に20年以上の居住歴になると約2倍の45%～48%にはねあがっている。学歴では初等教育（小学校・中学校卒）が多く49%に達し、中等教育（高等学校卒）が42%でこれに次いでいるが、高等教育（大学卒）は28%にとどまり、これらに比べてかなり少ない。

居住年数や学歴は職業に関係が強いと思われるが、現在の職業では、町会・近隣型は、自営業（開業医・僧侶等の自由業を含む、47%）、無職（44%、その70%は女性）に多く、経営者・管理職（31%）、雇用者（正規社員、パート・嘱託・アルバイト・臨時雇・内職、36%）に少なくなっていて、地域社会と関係が強い職業が背景にあることを伺がわせている。もっとも、就労形態もさることながら、就労日数の多寡が、地域社会とのつながりに直接に影響するとも考えられる。実際、就労日数が5日以上（37%）よりも1～2日（42%）・3～4日（44%）の高齢者や無職（44%）の高齢者の方に、町会・近隣型がやや多くなっている。配偶者の現在の職業でも、自営業（49%）や経営者・管理職(48%）が雇用者（正規社員42%、パート等39%）よりもやや多くなっている。

過去（50歳の時）の職業（以下単に過去の職業という時は、50歳の時の職業をいう）でみても、町会・近隣型は、自営業(49%）や、またパート等（50%）と無職（47%、いずれも女性が多く、当然専業主婦が含まれる）に多く、ホワイトカラー（専門職・専門技術職、事務的職業等、29%）や経営者・管理職（30%）には少ない。やはり、地域社会に縁が深いと思われる職業歴の高齢者に町会・近隣型が多いの

である。興味深いのは、勤務先の従業員規模がきいていて、規模が小さいほど町会・近隣型が多くなっている。小規模（1～29人、45%）は大規模（300人以上、29%）より多く、中規模（29～299人、36%）と官公庁（37%）はその中間にある。これは、企業は規模が小さいほど地域とのかかわりが強くなる傾向があるためであろう。

職業からも推察されるように、町会・近隣型は、性別では、男性（35%）より女性（47%）に多い。高齢者は加齢とともに健康を損ね易くなるが、健康状態では、病気・病臥がちの人（37%）よりも、無理はきかない人も含めて、健康な人（41%～43%）にやや多い。町会・近隣型は、居住年数とも関連するが、年齢では、60代前半（39%）・後半（40%）よりも、70代（46%）に多くなっている。家族形態では、町会・近隣型は、独居（一人暮らし、36%）だけが、核家族（夫婦のみ41%、夫婦と子ども42%）と拡大家族（43%）よりもやや少なくなっている点に注意したい。

住居形態、世帯収入、階層帰属意識の社会階層からみると、町会・近隣型は、住居形態では、借家（一戸建て、マンション、社宅・官舎等、36%）よりも持家（一戸建て、マンション、43%）に、世帯収入では、高所得（8百万以上、39%）より中・低所得層（8百万未満、4百万未満、43%）に、それぞれやや多いが、階層帰属意識（暮らし向きの程度）では、上・中上層（39%）、中層（43%）、中下・下層（40%）の階層の間には若干の差しか見いだせない。

町会加入型　町会加入型は、町内会・自治会に加入しているものの、近所の人とは日常的な接触をもっていないタイプであり、全体の24%をしめている。

この町会加入型は、居住年数が短いほど多くなる傾向が期待されそうだが、そうはっきりと現われていない。20年未満29%にやや多く、10年未満25%も平均をこえ、20年以上にわずかな差をつけて、その傾向を匂わしているものの、20年未満を措けば、あまり差はない。しかし、学歴では、高学歴ほど多くなる傾向がはっきり現われ、初等教育（18%）、中等教育（24%）、高等教育（35%）となっている。

現在の職業では、町会加入型は、自営業（24%）、雇用者（正規社員、パート等、25%）、無職（21%）を抜いて経営者・管理職（34%）が多い。それと呼応してか、就労日数でも、5日以上（27%）、3～4日（25%）、1～2日（23%）、無職（21%）となっていて、就労日数が多い高齢者ほど多くなる。配偶者の現在の職業では、自営業（22%）、経営者・管理職（23%）よりも、正規社員（30%）やパート等（28%）にやや多い。

過去の職業では、町会加入型は、自営業（21%）パート・嘱託等（17%）、無職（17%）よりも、ホワイトカラー（33%）や経営者・管理職（35%）に多い。勤務先の従業員規模では、小規模（22%）、中規模（26%）、大規模（33%）となっていて、規模が大きいほど町会加入型が多くなっている。官公庁（33%）は大規模並である。

町会加入型は、性別では、女性（17%）より男性（32%）がかなり多いのが特徴である。健康状態では、病気・病臥がちの人（23%）や無理はきかない人（23%）よりも、健康な人（26%）にやや多い。これと関連して、年齢では、70代（20%）よりも、60代前半（25%）・後半（26%）にやや多くなくなっている。家族形態では、町会加入型は、独居（15%）に少なく、核家族（夫婦のみ26%、夫婦と子ども28%）に多い。拡大家族（22%）は平均に近い。

社会階層からいえば、町会加入型は、住居形態では、借家（20%）よりも持家（25%）にやや多く、世帯収入では、高所得層（28%）、中所得層（26%）、低所得層（21%）で、高所得ほど多く、そして、階層帰属意識では、上・中上層（29%）、中層（24%）、中下・下層（23%）で、上・中上層にやや多くなっている。

近隣交際型　近隣交際型は、町内会・自治会には加入していないが、近所の人とは日常的に接触しているタイプであり、全体の17%をしめている。

この近隣交際型は居住年数が長くなるほどやや減少する傾向がある。10年未満の居住歴では20%になる近隣交際型は、特に50年以上の居住歴になると15%に下がる。学歴では、高学歴になるほど減少する傾向があり、高等教育（11%）は初等教育（20%）の約半分となっている。

現在の職業では、近隣交際型は、無職（18%）、雇用者（19%）に多く、経営者・管理職（10%）にやや少なくなっている。配偶者の現在の職業でも、正規社員（20%）にやや多く、経営者・管理職（13%）がやや少ないといった状況である。

過去の職業でみても、近隣交際型は、現在の職業の場合と同様に、パート等（22%）、無職（20%）にやや多く、経営者・管理職（9%）に少ないのが特徴である。勤務先の従業員規模では、近隣交際型は、大規模（12%）と官公庁（8%）よりも、小規模（18%）、中規模（18%）にやや多い。

近隣交際型は、性別では、男性（12%）より女性（22%）に多いのが特徴である。家族形態では、独居(26%)だけが、核家族（夫婦のみ15%、夫婦と子ども13%）や拡大家族（19%）よりも目立って多くなっている。これは地域疎遠型と共通する近隣交際型の特徴である。

近隣交際型は、住居形態では、持家（15%）よりも借家（22%）に多く、世帯収入では、高所得層（12%）、中所得層（15%）、低所得層（20%）で、所得の低下とともに増加し、階層帰属意識でも、上・中上層（12%）、中層（17%）、中下・下層（18%）で、下方に向かって増加する気配がある。

就労日数、健康状態、年齢はほとんど関係ない。

地域疎遠型　地域疎遠型は、町内会・自治会に加入せず、近所の人との日常的な接触を持っていないタイプであり、近隣交際型とほぼ同じ比率で、全体の18%をしめている。

この地域疎遠型は居住年数が短いほど増大する傾向が見える。20年以上の居住歴では14%になっているが、10年未満の居住歴では2倍の27%に達する。学歴では、初等教育（13%）、中等教育（17%）、高等教育（27%）となっていて、高学歴になるほど、地域疎遠型は確実に増大している。

現在の職業では、地域疎遠型は、自営業（13%）や無職（17%）よりも、経営者・管理職（25%）や雇用者（21%）にやや多い。配偶者の現在の職業では、自営業（12%）や正規社員（9%）よりも、無職（20%）、経営者・管理職（17%）、パート等（17%）にやや多くなっている。

過去の職業でみると、地域疎遠型は、自営業（12%）、パート等（11%）、無職（16%）よりも、ホワイトカラー（23%）、ブルーカラー（21%）、経営者・管理職（26%）に多い。勤務先の従業員規模では、小規模（15%）、中規模（20%）、大規模（27%）、官公庁（22%）となっていて、規模が大きいほど地域疎遠型が多くなっている。

地域疎遠型は、性別では、町会加入型と同じように、女性（15%）より男性（21%）に多いのが特徴である。健康状態では、無理はきかない人（17%）や健康な人（18%）よりも、病気・病臥がちの人（23%）にやや多いのは注意すべきであろう。健康にあまり恵まれないために地域疎遠型になることがあるということであろうか。また、家族形態では、地域疎遠型は、独居（23%）が核家族（夫婦のみ18%、夫婦と子ども17%）や拡大家族（16%）よりもやや多いのは、近隣交際型と共通する特徴である。

社会階層からみると、地域疎遠型は、住宅形態では、持家（16%）よりも借家（23%）に多く、これは近隣交際型と同じ特徴である。また、世帯収入では、中所得層（16%）・低所得層（17%）よりも高所得層（21%）に多くなっている。

就労日数、年齢、階層帰属意識では、大きな差はない。

これらの町会・近隣型、町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型について、比率の特に高い属性だけを拾って整理してみると、次のようになる。

町会・近隣型は、女性、居住年数50年未満・50年以上、学歴は初等教育、過去の職業は自営業・パート等・無職、従業員規模1～29人、現在の職業と配偶者の職業はともに自営業、年齢70歳以上に多い。

町会加入型は、男性、居住年数20年未満、学齢は高等教育、過去の職業は経営者・管理職、ホワイトカラー、従業員規模300人以上または公官庁、年収800万以上、現在の職業も経営者・管理職、配偶者の職業は社員、階層帰属意識は上・中の上に多い。

近隣交際型は、女性、借家、独居、過去の職業はパート等、無職に多い。

地域疎遠型は、男性、借家、独居、病気・病臥がち、居住年数10年未満、学歴は高等教育、過去の職業は経営者・管理職、ホワイトカラー、従業員

規模300人以上、現在の職業も経営者・管理職に多い。

すでに明らかであるが、町会・近隣型と近隣交際型では、男性より女性に多く、町会加入型と地域疎遠型は女性より男性に多い。近所の人との日常的な接触を通じて地域社会へ関与している高齢者は女性に多く、関与しない高齢者は男性に多いのである。また、近隣交際型と地域疎遠型は、ともに借家と独居に多い点で共通するのだが、近隣交際型は女性に、地域疎遠型は男性に多い。

3．地域参加型と社会活動

地域参加の４つのタイプは、基本的属性において、かなり明確に、それぞれの特徴を持っていることが知られたが、これら4つのタイプは社会活動や生活意識においては、それぞれどんな特徴を示すだろうか（表2）。

老人会・老人クラブ　まず、社会活動の一つとして、地域の老人会・老人クラブへの加入状況をみてみると、全体としては非加入が多く、加入率は19.1%ととどまっているのだが、地域参加型のなかでは、町会・近隣型（31%）は他の町会加入型（14%）、近隣交際型（12%）、地域疎遠型（6%）をはるかに上回っている。しかも、役員を経験している高齢者も、町会・近隣型（11%）はやはり町会加入型（3%）、近隣交際型（3%）、地域疎遠型（1%）を上回っている。町会・近隣型は、町内会・自治会に加入し、近所の人とも日常的に接触しているのであるが、この地域社会への積極的な関与の態度は、老人会・老人クラブについても、同じように現れているわけである。町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型においても、老人会・老人クラブについて、地域社会への消極的な関与の態度は、やはり同じように現れている。

団体加入　娯楽、スポーツ、教養、社会奉仕・ボランティアなどの、主に地域の人でつくる「地域」団体、仕事仲間でつくる「職域」団体、地域・職域以外の人々でつくる「自主」団体（ここではこう呼ぶことにする）への加入状況をみると、全体として、町会・近隣型の平均以上の加入率が目立ち、他の町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型のそれをこえている場合が多くなっている。町会・近隣型につづくのは町会加入型である。町会加入型は、職域・スポーツ、職域・教養、自主・スポーツ、自主・教養の団体加入で平均をこえているが、それでも町会・近隣型をこえる団体加入は、職域・スポーツのみである。近隣交際型と地域疎遠型の団体加入率は、平均をこえるものは一つもなく、特に町会・近隣型に対して明確なコントラストを示している。

町会・近隣型において、団体加入の比率が高い活動は、地域・娯楽団体（31%）、自主・娯楽団体（27%）、職域・娯楽団体（24%）であり、これについで比率が高い活動は、地域・社会奉仕・ボランティア（15%）、地域・スポーツ（13%）、自主・スポーツ（10%）であって、いずれにしても、娯楽団体とスポーツ団体が目立ち、それも「地域」が先導している。地域・社会奉仕・ボランティアがこの中に入っている点も見逃してはなるまい。町会加入型では、職域・娯楽（20%）、自主・娯楽（18%）、地域・娯楽（15%）の比率が高く、これに職域・スポーツ（9%）、自主・スポーツ（9%）、地域・スポーツ（8%）がつづいている。娯楽とスポーツの比率が高いのは同じだが、差は小さいにしても、「職域」が先行している。近隣交際型では、自主・娯楽（19%）、職域・娯楽（17%）、地域・娯楽（16%）の比率が高く、これに自主スポーツ（9%）、地域・スポーツ（7%）、自主・教養（6%）がつづいている。やはり、娯楽とスポーツの比率が高く、差も小さいが、「自主」が先頭にある。地域疎遠型は、全体として、近隣交際型よりも参加率は低いのだが、職域・娯楽（15%）、自主・娯楽（13%）、地域・娯楽（9%）の比率が高く、これに職域・スポーツ（8%）、自主スポーツ（6%）、地域・スポーツ（6%）がつづいている。この地域疎遠型は町会加入型と類似していて、「職域」が先行している。

これでみる通り、団体加入は娯楽団体とスポーツ団体の比率が上位にあるが、町会・近隣型は「地域」の、町会加入型と地域疎遠型は「職域」の、近隣交際型は「自主」の、それぞれの比率が上位に立っている。

表2　地域参加型と社会活動　(%)

			全体	町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
老ラ	加入役員		5.9	10.8	3.0	2.8	1.2
人ブ	加入のみ		13.2	19.7	11.0	9.5	4.4
ク**	非加入		75.8	65.1	82.8	79.7	87.5
団	地域・娯楽	**	20.8	31.4	14.6	16.1	9.1
体	スポーツ	**	9.5	13.4	7.5	6.8	5.5
加	教養	**	6.2	8.0	6.2	5.0	3.2
入	社会奉仕	**	8.9	14.8	6.4	4.1	2.8
	職業・娯楽	**	20.0	23.7	19.8	17.0	14.5
	スポーツ	**	7.6	7.6	9.4	5.1	7.6
	教養	**	4.8	5.9	5.4	3.5	2.7
	社会奉仕	**	5.2	7.9	4.4	3.3	1.7
	自主・娯楽	**	20.9	26.7	18.2	18.8	13.3
	スポーツ	*	8.6	9.6	8.7	8.6	6.1
	教養		6.1	6.7	6.9	5.5	4.4
	社会奉仕	**	5.7	8.2	5.3	4.0	2.3
団	全面不参加		46.9	36.8	48.0	53.7	62.1
体	二領域加入		30.0	39.9	27.2	23.5	16.8
**	一領域加入		23.2	23.4	24.8	22.8	21.1
余	趣味	**	66.8	71.5	67.8	61.8	59.3
暇	ゲーム	**	19.9	18.4	22.0	18.3	21.9
活	スポーツ	**	30.0	32.2	32.1	25.1	26.6
動	飲酒	**	21.7	19.7	25.3	16.9	26.2
・	図書館	**	17.6	17.0	19.6	14.3	17.2
定	文化講演	**	15.0	18.7	14.6	10.7	10.7
期	趣味教室	**	17.3	20.0	15.9	17.6	12.8
余	国内旅行	**	80.2	84.6	81.3	75.4	73.0
暇	海外旅行	**	22.0	22.4	22.0	19.1	22.1
活	繁華街	*	82.6	84.2	81.7	80.7	81.5
動	観劇映画	**	57.8	61.3	55.8	56.9	53.1
不	博物館	**	51.9	52.6	53.8	47.5	52.0
定	参詣	**	85.1	89.2	83.2	82.9	79.5
期	スポーツ	**	40.0	41.3	42.7	34.4	38.7
交	別居の子	**	24.5	29.8	17.9	29.6	16.6
際	兄弟姉妹	**	9.3	11.9	5.6	12.9	5.0
・	親戚	**	6.9	10.0	3.0	9.5	2.6
週	親しい友	**	36.5	52.5	16.4	47.3	15.7
近居	親しい友	**	55.7	70.9	39.6	63.3	34.5

この団体加入を「地域」、「職域」、「自主」の三領域を単位にしてひとまとめにしてみると、三領域参加はなく、二領域参加は30%、一領域参加は23%であり、一領域以上加入している「参加」は53%となり、逆に、一領域も加入していない全面不参加は47%となった。加入率は、町会・近隣型、町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型の順に低下している。

余暇活動　社会活動として、余暇活動をみてみよう。高齢者の余暇活動のうち定期的な余暇活動（定期的に、あるいは月1回以上「した」もの）は、全体として、多い順にあげると、趣味（67%）、スポーツ（体操・テニス・ゲートボール等、30%）、飲酒（22%）、ゲーム（20%）、図書館（18%）、趣味教室（17

%)、文化講演・市民大学（15%）となる。趣味とスポーツが上位にあるが、これは団体加入における娯楽とスポーツが上位にあることと呼応するものであろう。

地域参加のタイプでみると、町会・近隣型と町会加入型は、平均をこえる比率では、趣味（72%：68%）とスポーツ（32%：32%）ではほぼ同じ比率を示すが、町会・近隣型は文化講演（19%）、趣味教室（20%）で、町会加入型はゲーム（22%）、飲酒（25%）、図書館（20%）で異なる特徴を示している。地域疎遠型はゲーム（22%）と飲酒（26%）が、それぞれ平均を越えていて、この点では町会加入型と同じ特徴を示している。これは町会加入型と地域疎遠型は男性が多いことを関連していよう。近隣交際型だけは、どの余暇活動も平均以下であるが、趣味（62%）とスポーツ（25%）につづいて、ゲーム（18%）、趣味教室（18%）、飲酒（17%）が並んでいる。

定期的な余暇活動は、単純に「した」ものの全体量（比率の合計）からいうと、町会・近隣型と町会加入型は上位にあってほとんど変わらない程度に展開し、これに地域疎遠型がつづき、近隣交際型は最も少ない展開である。

高齢者の余暇活動のうち不定期的な余暇活動（この1年間に「した」ことのあるもの）は、全体として、多い順にあげると、神社・仏閣の参詣（85%）、繁華街での買物（83%）、国内旅行（80%）、観劇・映画（58%）、博物館・美術館（52%）、スポーツ（ハイキング、釣り、ゴルフ等、40%）、海外旅行（22%）となる。参詣、買物、国内旅行は、いずれも80%をこえ、大多数の高齢者の余暇活動であり、いわば年間3大余暇活動となっているといえよう。

地域参加型でみると、町会・近隣型は、どの余暇活動も平均をこえ、これらの年間の余暇活動が活発に行われていることを示している。町会加入型は、国内旅行（81%）、博物館（54%）、スポーツ（43%）、海外旅行（22%）が平均をこえている。地域疎遠型は、博物館（52%）、海外旅行（22%）で、平均をこえるのみであるが、町会加入型とは類似の傾向を見せている。近隣交際型は、どの余暇活動も平均を下回るが、しいて指摘すれば、地域参加型のなかで近隣交際型が最少の比率を示す余暇活動は、海外旅行、買物、博物館、スポーツである。

不定期的な余暇活動は、単純に「した」ことのあるものの全体量（比率の合計）からいうと、町会・近隣型、町会加入型、地域疎遠型、近隣交際型の順に並び、近隣交際型はやはり最下位である。

余暇活動の展開も、このように、地域参加型によって、量的にも質的にも異なっていて、それぞれの特徴を示していることが知られる。

交際　もう一つ、社会活動として、交際（「会って話をする」）をとりあげる。地域参加を4つのタイプに分ける軸の一つとして、近所の人との日常的な接触（一週間に少なくとも一回以上の交際）という基準を採用しているわけであるが、別居の子ども、兄弟姉妹、親戚、親しい友人について、この基準でみたらどうか（表2）。

全体として、高齢者の日常的な接触の展開は、近所の人（48%）、親しい友人（37%）、別居の子（25%）、兄弟姉妹（9%）、親戚（7%）といった状況にある。日常的な接触は、近所の人と親しい友人が多いのである。

地域参加型からみれば、町会・近隣型は、親しい友人（52%）、別居の子（30%）、兄弟姉妹（12%）、親戚（10%）、近隣交際型は、親しい友人（47%）、別居の子（30%）、兄弟姉妹（13%）、親戚（10%）となっていて、ほとんど同じ傾向を示している。町会・近隣型と近隣交際型は、近所の人との日常的な接触を持っている点で共通しているのだが、他の人との接触でも同じような展開を示しているわけで、しかも、両タイプともに、どの交際の比率も平均をこえている。特に親しい友人や別居の子どもとの日常的な接触をもつ高齢者の比率は高い。

これに対して、町会加入型は、別居の子（18%）、親しい友人（16%）、兄弟姉妹（6%）、親戚3%、地域疎遠型は、別居の子（17%）、親しい友人（16%）、兄弟姉妹（5%）、親戚（3%）となっていて、これら両タイプもほとんど同じ傾向を示しているのだが、いずれの交際も平均を下回り、町会・近隣型や近隣交際型の半分以下の比率になっている。つまり、町会加入型と地域疎遠型は、近所の人との日常的な接触だけでなく、別居の子、親しい友人、兄弟姉

妹、親戚との日常的な接触ももたない傾向が強いのである。

もっとも、日常的な接触の多寡は、近所の人を別として、接触の相手が近居しているかどうか、そもそも接触の相手がいるかどうかが問題になろう(表3)。別居の子ども、近居の子どもの有無については、確かに、町会・近隣型（81%:55%）と近隣交際型（77%:48%）に比較すると、町会加入型（74%:45%）と地域疎遠型（68%:42%）は少ないが、その差は大きくかけ離れているわけではない。兄弟姉妹については、町会・近隣型（32%）と近隣交際型（33%）は、町会加入型（27%）と地域疎遠型（30%）よりも大きくなっているが、やはりその差は大きくはない。配偶者の兄弟姉妹（義兄弟）もほぼ同様である。親戚については、町会・近隣型（50%）、近隣交際型（46%）、町会加入型（43%）、地域疎遠型（39%）となっていて、差がやや広がっているが、親しい友人に比較すれば、その差は必ずしも大きいとはいえない。親しい友人をみると、町会・近隣型（71%）と近隣交際型（63%）に比較して、町会加入型（40%）と地域疎遠型（35%）はかなり少なく、それだけ日常的な接触は限定されよう。

こうしてみると、親しい友人を別にすれば、4つのタイプにおける、別居の子、兄弟姉妹、親戚の近居している比率の差は、4つのタイプにおける日常的な接触の比率の差よりはかなり小さいといっ

表3　地域参加と家族・親戚の居住　(%)

			全体	町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
子	別居の子いる	**	75.8	80.8	73.7	74.7	68.1
	近居の子いる	**	49.2	55.4	45.0	48.0	41.9
孫	孫同居		5.8	6.1	4.6	7.5	5.0
**	孫別居		49.3	52.7	48.3	48.8	43.4
	孫同・別居		13.1	15.8	10.7	12.9	10.5
	ない		28.7	22.8	33.6	27.2	37.4
親	兄弟近居	**	30.6	31.8	27.2	32.5	30.5
族	義兄弟近居	**	26.3	27.7	26.6	26.0	22.9
	親戚近居	**	45.7	50.2	42.5	46.2	39.0

表4　地域参加型と生活意識　(%)

			全体	町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
孫	孫の手本	**	51.7	60.4	45.3	54.0	38.7
	若々しい	**	49.8	57.4	44.2	51.8	38.0
	責任果たす	**	40.1	47.4	34.1	42.3	29.4
	よかった	**	54.2	61.8	48.8	57.7	40.5
家	長男の世話	**	59.8	62.6	59.3	60.3	53.1
族	長男の相続	**	54.5	58.8	52.3	53.6	47.9
	養子	**	18.4	21.3	16.3	16.7	16.1
	親と同居	**	30.2	34.7	26.1	31.4	24.0
	親の扶養	**	55.2	59.2	51.1	58.4	48.5
	家事分担	**	53.9	54.6	55.0	52.4	52.1
モ	家族親戚満足	**	78.6	84.3	75.2	78.9	69.5
ラ	生活に満足	**	76.6	80.9	73.4	74.6	72.6
―	友人に満足	**	72.7	80.7	65.3	73.8	62.7
ル	加齢人生悪化	**	15.8	13.8	16.4	17.3	18.1
	去年同じ元気	**	56.5	58.9	56.6	53.8	53.2
	加齢役立たず	**	37.4	37.6	35.2	38.6	38.5
	加齢はよい	**	23.3	24.5	24.5	22.8	19.1

ていいであろう。つまり、接触の相手がほぼ同じように近居している場合でも、4つの地域参加型においては、それぞれに接触の程度は異なっているとみられるのである。

次に、地域参加型を生活意識の上から捉えてみよう。

4．地域参加型と生活意識

4つの地域参加型は、生活意識においては、どのように差異を示すであろうか。生活意識を、孫についての考え方、家族のあり方についての考え方、生活満足感・老いについての考え方等のモラールの調査データで検討してみよう（表4）。

生活意識　孫についての考え方は、全体では「孫のお手本になるよう、いつも心がけたい」52%、「孫がいるおかげで若々しい気持ちになれ、うれしい」50%、「孫がいるおかげで、社会に対する責任をはたしたように思える」40%、「孫がいるおかげで、生きていてよかったように思える」54%という結果になっている。

これを地域参加型でみると、町会・近隣型と近隣交際型は、「お手本」(60%:54%)、「若々しい」(57%:52%)、「責任をはたした」(47%:42%)、「よかった」(62%:58%) となっていて、前者が後者より比率がやや高いものの、いずれの項目でも平均を上回りつつ、同じような回答パタンを示した。これに対して、町会加入型と地域疎遠型は、「お手本」(45%:39%)、「若々しい」(44%:38%)、「責任をはたした」(34%:29%)、「よかった」(49%:41%) となっていて、やはり前者が後者より比率が高いものの、いずれの項目でも平均を下回りつつ、同じような回答パタンを示した。

孫についての考え方では、町会・近隣型と近隣交際型、町会加入型と地域疎遠型は、いずれの場合も、それぞれに類似の傾向を示しているのだが、町会・近隣型と近隣交際型は町会加入型と地域疎遠型よりも強く肯定する態度を見せるのである。

家族のあり方についての考え方は、全体では、「長男は親を責任を持って世話すべき」60%、「長男は多く相続するのが当然」55%、「養子を迎える必要」18%、「子の一人は親と同居すべき」30%、「高齢の親を必ず扶養すべき」55%、「家事に男も参加すべき」54%となった。

地域参加型でみると、町会・近隣型は、いずれの項目においても、平均をこえ、他のタイプより比率が高く、もっとも肯定的な回答をしている。近隣交際型は、「長男は世話」61%、「子の一人は親と同居すべき」31%、「親を必ず扶養すべき」58%において平均をこえ、全体としても、町会・近隣型についで、肯定的な回答を示した。町会加入型は、面白いことに、「家事に男も参加すべき」55%で地域参加型のなかでもっとも高い比率を示したが、他の項目では、平均を割り、かつ町会・近隣型や近隣交際型よりも下回る比率となった。地域疎遠型は、どの項目も平均以下の比率であり、最少の比率で、もっとも肯定する傾向は薄くなっている。

こうしてみると、家族のあり方の考え方については、町会・近隣型がもっとも肯定的で、近隣交際型はこれに次いで肯定的であるが、町会加入型と地域疎遠型は、この両者ほど肯定的ではない。

生活満足感・老いについての考え方等のモラールは、全体としては「家族や親戚との行き来に満足」79%、「生活に満足」77%、「友人との行き来に満足」73%、「加齢とともに人生悪化」16%、「去年と同じくらい元気」57%、「加齢で前より役に立たない」37%、「加齢は考えていたよりよい」23%となっている。

地域参加型においては、町会・近隣型は、これらの項目のうち「加齢とともに人生悪化」16%を除き、「加齢で前より役に立たない」38%を含めて、すべて平均を上回る回答で、地域参加型のなかで、もっとも肯定的・意欲的な態度を見せている。町会加入型は、「加齢は考えていたよりよい」25%だけが平均をかろうじてこえていて、町会・近隣型と比較すると、全体として肯定的・意欲的な態度は薄い。近隣交際型は、「友人との行き来に満足」74%、「加齢とともに人生悪化」17%、「加齢で前より役に立たない」39%が平均をやや上回っていて、老いについてややマイナスの反応が出ている。さらに、地域疎遠型になると、「加齢とともに人生悪化」18%、「加齢で前より役に立たない」39%が平均を上回り、

地域参加型ではもっとも高い比率になっていて、マイナスの反応だけが目立っている。

生活満足感・老いについての考え方等は、町会・近隣型がもっとも肯定的・意欲的であり、町会加入型がこれについで肯定的・意欲的だが、町会・近隣型よりは薄い。近隣交際型から地域疎遠型になると、いっそう肯定的・意欲的ではなく、むしろマイナスの反応が目についてくる。地域参加型は、生活満足感・老いについての考え方等に関しては、また異なる特徴を示しているといってよいであろう。

5．地域参加型と地域文化

東京23区のなかで、地域参加型は、どの地域でも同じように現れてくるのであろうか。同じ東京23区といいながら、地域参加型は、地域によって異なって現われてくるのではないか。これは当然考えられるべき次の問題である。実際、地域参加型の比率は、地域によって異なっている。

東京23区は、都心地域（千代田、中央、港）、山手地域（新宿、文京、渋谷、豊島）、下町地域（台東、墨田、江東、荒川）、南部地域（品川、大田区）、西部地域（目黒、世田谷、中野、杉並、練馬）、北部地域（北、板橋）、東部地域（足立、葛飾、江戸川）の7地域に区分することにする（表5）。

この7区分にしたがうと、町会・近隣型は、東部や下町に多く約50%に達するが、これに対し、西部地域は32%にとどまり特に少なく、その他の地域はほぼ40%であって、地域的に明瞭に区分される。町会加入型は、下町（17%）と東部（22%）に少なく、これに比べて、西部（26%）と北部（24%）に多い。地域疎遠型も、町会加入型と似ていて、東部（12%）と下町（13%）に少なく、西部（24%）、山手（19%）、都心地域（19%）にやや多い。近隣交際型は、下町（21%）や西部（18%）にやや多く、その他の地域はほぼ同じ（16%）であるが、全体に大きな差はない。これでみると、地域参加型については、おおまかな社会地図が描けるように思われる。少なくとも、下町と東部を含む東京の東側の地域と、山手と西部を含む東京の西側の地域とは、塗り分けることができるようである。高齢者の地域社会への関与の仕方は、地域による差異を見せるのである。

表5　性別　×　地域参加型**「地域別」　(%)

		町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
		41.3	23.9	17.0	17.8
都心地域	全体	41.7	24.1	15.5	18.7
	男	41.1	37.0	5.5	16.4
	女	42.1	15.8	21.9	20.2
山手地域	全体	40.9	24.1	16.1	19.0
	男	35.3	31.7	9.9	23.0
	女	45.6	17.6	21.3	15.5
下町地域	全体	49.9	16.7	20.6	12.8
	男	48.9	23.7	12.8	14.6
	女	50.7	11.5	26.4	11.5
南部地域	全体	42.7	24.6	16.1	16.7
	男	36.7	32.2	11.9	19.2
	女	48.9	16.5	20.6	14.0
西武地域	全体	31.8	26.3	17.9	24.0
	男	22.8	35.5	13.2	28.7
	女	40.2	17.9	22.2	19.7
北部地域	全体	42.8	26.9	15.5	14.7
	男	37.2	34.2	10.3	18.4
	女	47.6	20.7	20.0	11.6
東部地域	全体	51.3	21.6	15.5	11.5
	男	44.4	28.8	12.4	14.4
	女	58.1	14.7	18.6	8.7

地区×地域参加**　地区×性別×地域参加**

この地域による差異について、性別、学歴、職業、帰属階層意識などで、もう少し検討してみたい。

まず性別だが、すでに見たように、地域参加型は、性別によってかなり異なる比率になっていて、町会・近隣型は男性（35%）よりも女性（47%）に多く、近隣交際型も男性（12%）よりも女性（22%）が多いが、町会加入型は男性（32%）が女性（17%）よりも多く、地域疎遠型も、同じように、男性（22%）が女性（15%）よりも多かった。しかし、この男女の差異は、7地域におろしてみると、かなり多様な状況が見えてくる（表5、図1）。

町会・近隣型では、男女の比率の差は、下町（1.8%の差）、都心（1.0%）はかなり小さいが、西部（17.

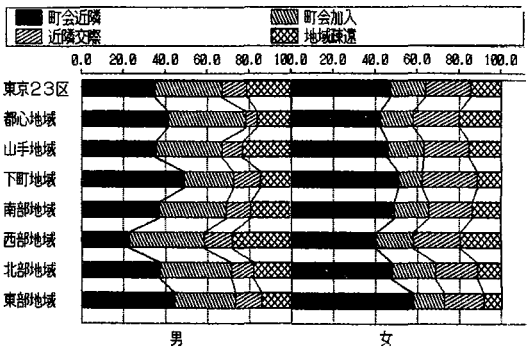

図1　性別×地域参加型［地域別］

4%）は大きく、東部（13.7%）、南部（12.2%）、北部（10.4%）、山手（10.3%）は、その中間にある。つまり、下町や都心では、町会・近隣型に関するかぎり、男女の差はほとんど出てこないのだが、西部では、町会・近隣型は女性に多く、男性に少ないということになる。

近隣交際型では、男女の差は、下町（13.6%）や都心（16.4%）は東部（6.2%）や南部（8.7%）より大きくなっていて、近隣交際型は、下町や都心では女性に多いが男性に少なく、東部や南部では男女の差は大きく出てこないという状況になっている。

町会加入型では、男女の差は、下町（12.2%の差）や北部（13.5%）が西部（17.6%）や都心（21.2%）より小さく、地域疎遠型でも、下町（3.1%）が山手（7.5%）や西部（9.0%）より小さいという状況になっている。

いずれにしろ、これで知られるように同じ男性、同じ女性であっても、地域によって、地域社会への関与の仕方は異なって現れている。その地域の差は、少なくとも、下町と西部のコントラストというパタンを示すものである。

学歴でみよう（表6）。町会・近隣型の場合、高等教育の学歴の高齢者は、下町や東部と山手や西部の差（15%）が大きくなっている。中等教育の学歴の高齢者も、やはり東部や下町と山手や西部の差が（16%）が大きくなっている。初等教育の学歴の高齢者も下町や東部と西部の差（13%）が認められるが、ただ山手は、東部、下町より比率が高い

表6　学歴　×　地域参加型**　［地域別］　(%)

		町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
		41.3	23.9	17.0	17.8
都心地域	初等教育	41.1	21.4	19.6	17.9
	中等教育	46.9	22.2	16.0	14.8
	高等教育	34.7	30.6	8.2	26.5
山手地域	初等教育	54.5	20.8	19.6	17.9
	中等教育	40.2	30.1	16.0	14.8
	高等教育	28.0	33.5	8.2	26.5
下町地域	初等教育	51.3	13.4	25.7	9.6
	中等教育	49.7	20.0	16.0	14.3
	高等教育	44.8	23.9	11.9	19.4
南部地域	初等教育	51.1	17.7	17.7	13.4
	中等教育	41.1	24.8	16.8	17.3
	高等教育	30.3	37.8	9.2	22.7
西武地域	初等教育	40.1	16.7	22.3	20.9
	中等教育	35.3	24.2	19.7	20.8
	高等教育	20.1	37.4	11.7	30.9
北部地域	初等教育	47.9	18.6	22.9	10.6
	中等教育	44.1	29.9	13.7	12.3
	高等教育	35.0	35.9	6.8	22.3
東部地域	初等教育	53.0	20.6	17.1	9.3
	中等教育	51.1	23.0	14.2	11.7
	高等教育	42.7	24.0	10.7	22.7

点は異なっている。

いずれにしろ、同じ学歴でも、地域によって町会・近隣型の比率は異なって現れ、しかも、下町や東部と西部のコントラストというパタンで現れているのである。

職業（50歳の時の職業）ではどうか（表7）。まず、町会・近隣型を、例えば自営業でみると、東部や下町に対する西部の比率の低さが認められ、ホワイトカラーでみても、都心、東部、下町に対する西部の比率の低さが認められる。町会加入型は、経営者・管理職では、下町に低く、西部や北部に高いが、ホワイトカラーは、都心、下町に低く、北部に高い。地域疎遠型は、経営者・管理職では、東部には少ないが、山手や西部に多く、ホワイトカラーでは、都心や下町に少なく、西部に多い。

これらの町会・近隣型、町会加入型、地域疎遠型をとりまとめていうと、それらは、例えば自営

表7　50歳時の職業　×　地域参加型**［地域別］（%）

		町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
		41.3	23.9	17.0	17.8
都心	自営業	42.7	21.3	13.3	22.7
	経営管理	32.4	35.3	8.8	23.5
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	45.0	25.0	20.0	10.0
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	53.8	23.1	−	23.1
	ﾊﾟｰﾄ	30.8	15.4	46.2	7.7
	非該当	46.9	21.9	18.8	12.5
山手地域	自営業	50.6	22.1	16.9	10.4
	経営管理	23.2	30.3	10.1	36.4
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	32.0	30.7	16.0	21.3
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	40.9	21.2	19.7	18.2
	ﾊﾟｰﾄ	40.0	26.7	22.2	11.1
	非該当	49.5	17.4	15.6	17.4
下町地域	自営業	53.7	17.5	21.5	7.3
	経営管理	47.8	21.7	6.5	23.9
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	40.0	28.9	17.8	13.3
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	43.4	18.1	19.3	19.3
	ﾊﾟｰﾄ	52.9	15.7	18.6	12.9
	非該当	52.1	6.4	29.8	11.7
南部地域	自営業	45.7	23.9	18.1	12.3
	経営管理	38.3	34.6	6.2	21.0
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	29.8	29.8	16.7	23.8
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	42.0	25.0	16.1	17.0
	ﾊﾟｰﾄ	51.3	17.9	20.5	10.3
	非該当	50.0	15.4	19.2	15.4
西部地域	自営業	40.4	21.3	22.3	16.0
	経営管理	19.1	39.0	10.3	1.6
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	21.7	34.0	14.8	29.5
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	25.4	27.1	18.1	29.4
	ﾊﾟｰﾄ	43.1	15.7	25.5	15.7
	非該当	41.1	18.2	20.0	20.8
北部地域	自営業	52.0	18.4	16.3	13.3
	経営管理	31.6	36.7	12.7	19.0
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	32.9	38.4	8.2	20.5
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	37.3	37.3	9.6	15.7
	ﾊﾟｰﾄ	52.6	15.8	26.3	5.3
	非該当	47.9	18.5	20.2	13.4
東部地域	自営業	56.3	19.5	14.9	9.3
	経営管理	60.0	28.6	5.7	5.7
	ﾎﾜｲﾄｶﾗｰ	35.1	35.1	14.3	15.6
	ﾌﾞﾙｰｶﾗｰ	41.7	23.3	16.1	18.9
	ﾊﾟｰﾄ	60.4	14.6	14.6	10.4
	非該当	53.9	17.8	20.6	7.8

業、ホワイトカラー、経営者・管理職のいずれの場合にせよ、地域によって異なる比率で現われている。同じ自営業、同じホワイトカラーでも、地域が異なれば、地域社会への関与の仕方は異なるのである。しかも、それはやはり、下町と西部のコントラストのパタンを核のようにして含んでいる。

階層帰属意識による分析はもはや必要はないのであろう。図表をあげるにとどめるが、意味するところは同じである（表8、図2）。

表8　帰属階層意識　×　地域参加型**［地域別］（%）

		町会近隣	町会加入	近隣交際	地域疎遠
		41.3	23.9	17.0	17.8
都心地域	上・中上	36.2	23.4	8.5	31.9
	中	44.2	29.9	13.0	13.8
	中下・下	47.2	18.9	18.9	15.1
山手地域	上・中上	41.2	29.4	9.8	19.6
	中	41.2	23.9	18.1	16.8
	中下・下	35.5	24.0	17.5	23.0
下町地域	上・中上	52.2	20.9	14.9	11.9
	中	53.1	16.7	18.7	11.5
	中下・下	45.5	16.5	24.0	14.0
南部地域	上・中上	43.9	28.8	6.1	21.2
	中	44.0	24.8	16.2	15.8
	中下・下	43.5	22.8	17.2	16.4
西部地域	上・中上	30.0	31.8	15.0	23.2
	中	32.8	25.1	18.0	24.0
	中下・下	32.1	24.0	19.4	24.6
北部地域	上・中上	46.7	36.7	8.3	8.3
	中	46.9	27.4	13.7	11.9
	中下・下	36.2	26.1	17.6	20.2
東部地域	上・中上	48.8	26.3	12.5	12.5
	中	55.6	19.4	16.4	8.6
	中下・下	50.0	23.4	14.4	12.2

もはや繰り返すまでもないが、地域参加型は、性別、学歴、職業などの基本的属性によってその特徴を形成していると考えられるが、しかし、地域参加型は、それだけではなく、時にはそれ以上に、地域の差によって、その特徴が影響される傾向がある。同じ基本的属性でも、地域参加型は、地域の差によって、その発現の仕方は異なってくる傾向が認められる。その理由をこれまでの検討は明

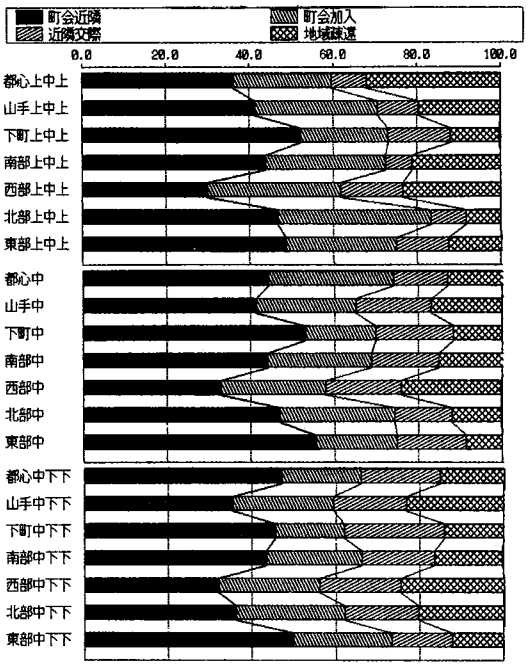

図2　帰属階層意識　×　地域参加型〔地域別〕

らかにしていない（またそれを狙ってもいない）のだが、下町と西部のコントラストのパタンが見い出される点にてらして、地域の独自の統一性・統合性の存在が示唆されているように思われる。別の言葉で言えば、それは地域文化といってもいいものであろう(*)。

＊ こういった「地域」の影響については、前掲の木下栄二・高橋勇悦「大都市高齢者の学習・文化活動」（都市研究センター『総合都市研究』39、1990)、および森岡清志・中林一樹・木下栄二・高橋勇悦「大都市高齢者の文化創造に関する査の概況」（都市研究センター『総合都市研究』39、1990）の論文でもすでに指摘している。

まとめ

われわれは、地域参加型として、町会・近隣型、町会加入型、地域疎遠型、近隣交際型の4つのタイプを設定したが、東京（23区）では、地域社会に関与していない地域疎遠型は18%で少なく、地域社会に関与している、町会・近隣型、町会加入型、近隣交際型は、合わせて82%に及び、非常に多い。これらの4つの地域参加型は、居住年数、学歴、職業、住居形態、性別などの属性からみると、それぞれかなり明確な特徴を持っている。

4つの地域参加型の地域社会への関与の態度は、社会活動や生活意識においても異なる特徴を見せる。

地域参加型の町内会・自治会への加入や近所の人との日常的な接触において示している積極性・消極性、つまり町会・近隣型がもっとも積極的で、地域疎遠型はもっとも消極的な態度は、例えば老人会・老人クラブについても、やはり同じように現れている。

団体加入では、その加入率からいって、娯楽団体とスポーツ団体の比率が上位にあり、町会・近隣型は「地域」と、町会加入型と地域疎遠型は「職域」と、近隣交際型は「自主」と、それぞれの関係を伺わせつつ、町会・近隣型はもっとも好調で、町会加入型、近隣交際型、地域疎遠型にいくにつれて低調になっている。

定期的な余暇活動では、4つの地域参加型はそれぞれの特徴を見せるだけでなく、量的にみると、町会・近隣型と町会加入型は同じ程度に大きく展開し、これに地域疎遠型がつづき、近隣交際型は最も小さい展開である。不定期的な余暇活動でも、4つの地域参加型はそれぞれの特徴を示し、量的にみると、町会・近隣型、町会加入型、地域疎遠型、近隣交際型の順に並び、近隣交際型はやはり最下位である。

交際においては、町会・近隣型と近隣交際型は、別居の子、親しい友人、兄弟姉妹、親戚との日常的な接触は多いのだが、町会加入型と地域疎遠型は、これらの人々との日常的な接触ももたない傾向が強い。接触の相手がほぼ同じように近居していても、4つの地域参加型は接触の程度は異なってくる。

孫についての考え方でみると、町会・近隣型はもっとも肯定的、町会加入型は次いで肯定的で、町会加入型と地域疎遠型よりも強く肯定する態度を見せる。家族のあり方の考え方でみても、町会・近

隣型、近隣交際型は肯定的であるが、町会加入型と地域疎遠型はそれほど肯定的ではない。生活満足感・老いについての考え方等は、町会・近隣型はかなり肯定的・意欲的、町会加入型はやや肯定的・意欲的だが、近隣交際型や地域疎遠型はあまり肯定的・意欲的ではなく、むしろマイナス反応を示す。

4つの地域参加型は、性別、学歴、職業などの基本的属性によって規定されるが、それとともに、地域文化によっても規定される。つまり、地域参加型は、地域社会によって、その発現の程度が異なってくる。

われわれの4分類は、一定の基本的属性によって特徴づけられ、それぞれ特徴的な一定の活動パタンや意識のパタンを示し、地域参加型の分類として有効であり、意味があるといっていいであろう。

高齢者の地域社会への関与という点からみれば、4つの分類のうち、地域社会への関与がもっとも積極的・意欲的な町会・近隣型は、社会活動・生活意識においてももっとも積極的・意欲的タイプであり、逆に地域社会への関与がもっとも消極的・非意欲的な地域疎遠型は社会活動・生活意識においてももっとも消極的・非意欲的である。町会加入型と近隣交際型はいわばその中間に位置している。

高齢者と地域社会との関連の実態を把握しようとする試みとして、われわれは4つの地域参加型を設定したが、この地域参加型はそれぞれの特徴を比較的はっきりと持っていることが知られ、今後、高齢者の地域社会への関与の問題を考える上で、多くの手がかりを示唆するように思われる。

Key Words（キー・ワード）

Elderly in central Tokyo（東京の高齢者）,Types of community participation（地域参加型）,Chounaikai（町内会）,Neighbors（近隣）,Aged society（高齢社会）

FOUR TYPES OF COMMUNITY PARTICIPATION BY THE ELDERLY OF CENTRAL TOKYO AND THEIR RESPECTIVE CHARACTERISTICS

Yuetsu Takahashi

Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No.48, 1993, pp. 5-21

Abstract

In this paper, we study the relation between the daily life of the elderly and th community in our aging society. We focus on the elderly's participation in the community, which falls into four categories depending on the presence [+] or absence [−] of two attributes: membership in the *Chonaikai* (organization of community residents) and good neighborly relations. We derive four types of community participation: 1) the *Chokai-Kinrin*-type ([+] Chonaikai, [+] neighbors), 2) the *Chokai*-type ([+] *Chonaikai*, [−] neighbors),3) the Kinrin-type ([−] *Chonaikai*, [+] neighbors), and 4) the Isolated type ([−] Chonaikai, [−] neighbors).

Analysis of the data collected in the twenty-three Central Tokyo Wards revealed the different characteristics of each type of elderly community participation in accordance with the attributes of the elderly and their social activities or social consciousness in daily life.

It also showed that community culture greatly influences the frequency of community participation. This classification of community participation is expected to contribute to further studies of the relation between the daily life of the elderly and the community.